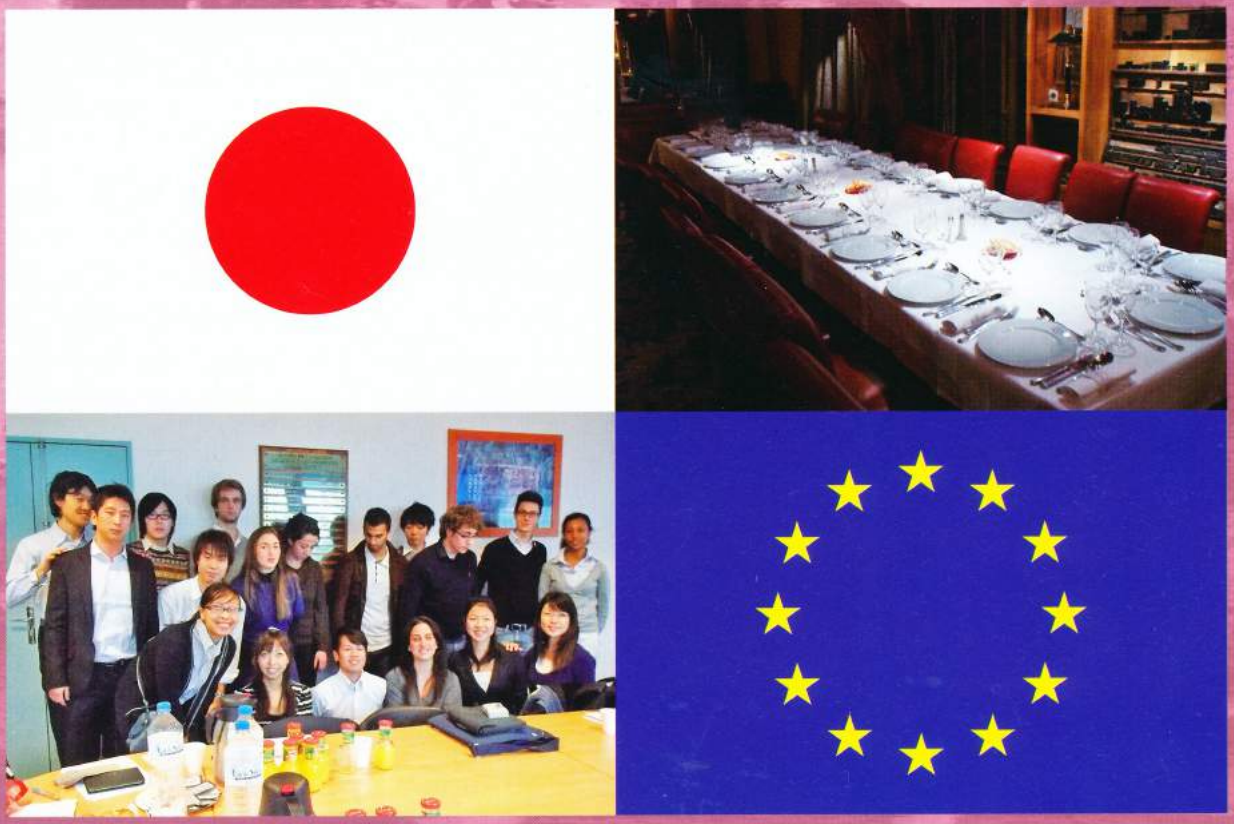
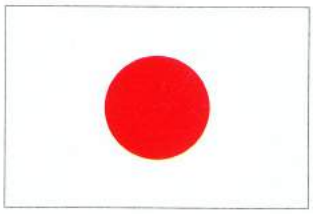
Yokohama National University
Faculty of Economics

Euro-Japan Dialogue 2010 Report
2010年度　欧州英語討論会報告書





1 ……ご挨拶（マッコーレー教授）

2 ……ご挨拶（石渡講師）

3 ……YNUメンバーの報告（日本）

8 ……企業訪問報告（J.P.Morgan）

9 ……ヨーロッパメンバーの感想

11 ……Euro-Japan Dialogue: Frequently Asked Questions

13 ……準備日程

14 ……History of Euro-Japan Dialogue

16 ……2010年度欧州英語討論会 参加者アンケート結果

YOKOHAMA National University

The Changing Discourse Regarding English as a Global Language

Professor Alexander McAulay

I contend that the day non-native speakers of English become aware of their status as speakers of EIL (English as an International Language), native-speaker control of the language will disappear, and non-native speakers will feel entitled to the authoritative use of a variety of the language that belongs to them. When that happens, native speakers will need to learn the conventions of EIL in order to communicate successfully with the larger community of English language speakers.

Enric Llurda, 2004

The 5th Euro-Japan Dialogue was a resounding success, thanks in large part to the grace and generosity offered by our hosts, University of Paris-Est Creteil in France, and Bournemouth University in England. A three-way dialogue with Milano-Bicocca University from Italy on the Paris campus was a welcome innovative feature. Another new feature was competition for places – 19 YNU students applied for the 10 available places, and the competition looks set to be fiercer in 2011 as the programme grows in visibility and stature.

This was my third year in charge of the programme, but my first visit to a native English speaking campus. Recalling Llurda's words quoted above, the experience led me to reflect on the changing contexts for the English language in international settings.

In 2006, the then President of France Jaques Chirac famously walked out of an EU summit in Brussels when a French businessman addressed the audience in English. A few years later, in 2009, soon-to-be German Foreign Minister Guido Westerwelle remonstrated with a BBC reporter who tried to ask a question in English at a press conference in Germany. Both politicians were roundly vilified in the press for their actions; *The Independent* in the UK called Chirac's actions "a fit of pique", while *Spiegel Online* put Westerwelle's response down to "contrariness and bluster."

The stories are emblematic of wider tensions engendered by the seemingly inexorable ascendancy of English as the world's lingua-franca *sine pari*. However, while commentators argue about the merits of this trend, we teachers of English as a Foreign Language in Japan have the task of fortifying our students with the necessary language skills that allow them to participate in our increasingly globalized societies. The Euro-Japan Dialogue, having completed its fifth year, is an established opportunity on the YNU calendar for students to extend their English communication skills in authentic overseas settings. Personally, I am humbled by the thought that we have visited five European universities, held debate, discussion and social sessions with hundreds of students and staff members in English, and all this happened with only one native speaker of the language present – me.

This year, at Bournemouth University in the UK, as in 2007 when the programme made its way to Cardiff University, the Japanese contingent felt the weightier challenge of debating with native speakers versus non-native English speakers in Europe. Quite simply, there was some parity in speaking English with the French, and an awareness of a lack of an even playing field when communicating with the Brits.

The rise of English was seen until recently as giving native speakers an unfair advantage in arenas such as academia and business. However, the discourse has shifted towards seeing the advantage as lying in multilingualism, rather than simply speaking English. English is already spoken by more people as a second language than as a native tongue. As that growth continues, ownership of the language slips further away from those who speak it as a birthright. In the 21st century, Brazilians are doing business with Germans in English, Koreans with Japanese, Chinese with Saudis – and there is no advantage to be had there for Brits or Americans.

On a fascinating visit to J.P. Morgan's Bournemouth facility, kindly organized by our colleagues in the Business School at Bournemouth University, a top manager told us: "We love language skills." One of the main recruiting factors in the organization is an ability to speak more than one language. A recent article in *Times Higher Education* estimated that the UK's lack of language skills had a cost of £9 billion to the economy. Being British, it is now clear to me that my compatriots, far from being privileged by speaking English, are in fact handicapped by their tendency towards monolingualism. As an English teacher in Japan, it is my professional duty to ensure that Japan breaks free of its own monolingual tendencies.

English will continue to grow, but within a changed context. Chirac was roundly criticized for his walk out, but future generations, more aware of multilingualism and cultural appropriacy, will harshly judge the arrogance of the decision to use English by the French businessman, presenting in a Francophone country, to a room teeming with EU translators. In a similar vein Westerwelle may now be a figure of fun, but the BBC will soon find it difficult to justify sending a non-German speaking reporter to a political press conference in Germany.

English is an indispensable tool for our students, and the Euro-Japan Dialogue will continue to foster this necessary skill, as well as friendship and collegiality between Japanese and Europeans. As the programme grows, an added aim is to look beyond 'learning English' to the value of multilingualism, the opportunities it affords and the responsibilities it entails.

欧州英語討論会に参加するということ

石渡　圭子

欧州英語討論会は現地集合現地解散のプログラムです。フォーマットとしては１週間に２校訪問します。１校当たり２日滞在し、滞在中に討論会や企業訪問等を行います。現地での活動期間は１週間ですが、欧州英語討論会への参加は事前準備や事後報告会、報告書の作成などもあり、半年間、このプログラムに関わることを意味します。

今年度はパリ東大学クリティユ校（フランス）とボーンマス大学（イギリス）を訪問し討論会をしました。前者では滞在した２日間全てを討論会に費やし、後者では１日目に討論会、２日目はボーンマス大学の学生と一緒にJP Morganに企業訪問をしました。

さて欧州英語討論会には３つの目的があります。

1．実践的かつ高度な英語力養成：英語討論会などを通して
2．国際交流の促進：現地の学生との交流などを通して
3．経済学的な関心への喚起：現地の企業見学、経営者との懇談などを通して

討論会を実施するに当たり、これをどの程度達成できるかは参加者の努力に負うところが多いと思います。参加者がどのように取り組むかで成功するか失敗するかが決まると言っても過言ではありません。

今年度欧州英語討論会は参加希望者が多い上、面接の結果、経済学や英語、また国際交流や国際関係に関心の高い学生ばかりであることがわかりました。そこで、定員の増加をすることに決めました。しかし、残念なことに全員参加を可能にするまでには枠を広げることはできませんでした。

決定した参加者10人のバックグラウンドは様々で海外在住経験者（フランス、アメリカ、チャドからの帰国生、留学経験者など）が７名、今年、初めて、学部留学生（モンゴル）１名も参加しました。その他には卒業後、外資系企業に就職する者、大学内外で国際交流活動に積極的に活躍している者、短期交換留学希望者などです。英語能力に優れ、問題意識の高い参加者達でした。参加決定後にも、意欲的に準備に取り組み、帰国後のアンケートでは準備に要した時間は50時間という回答もありました。

このような参加者の努力により、討論会は成功をおさめることができました。討論会はプレゼンテーションとそれに関する質疑応答、そしてディスカッションの３部構成になっています。プレゼンテーションもよくできていましたし、質疑応答、討論も満足のいくものでした。討論会の目的である実践的かつ高度な英語力の養成に繋がったと思います。昼食会や反省会の席でも現地の学生や教員と積極的に親しく交わることができ、訪問大学との交流促進にも貢献できました。企業訪問先のJP Morganではインターンシップや採用のプロセス、企業概要に関して丁寧な説明がありました。参加者はここでも関心をもって質問していました。休憩時間には企業のトップと歓談し、就職情報も収集することができました。その結果、就職に関して視野が広がったという参加者の声も聞けました。

欧州英語討論会は討論会開催を引き受けてくれる大学があってこそ実現できるプログラムです。受け入れ先の大学の都合で時程やプログラムの内容が変更することもあります。討論会の趣旨やフォーマットについて綿密に連絡をしていても、そのフォーマットが変更されることもあります。各大学の教育スタイルが討論会にも色濃く反映され、参加者はそのスタイルの違いや文化に驚いたこともあります。しかし拒絶することなく現地のスタイルに順応し、物怖じせずに挑むこともできました。移動中、交通渋滞に巻き込まれ予定していた計画を断念することもありました。しかしながら参加者全員がそのような変更を即座に受容する適応力があったこと、いつも積極的にその場を楽しんでいた様子が印象的でした。。

YNUメンバーの報告

JAPAN

私の欧州英語討論会

石井　翔平　経済システム２年

私が今回討論会に参加した理由は英語での実践的な議論に魅力を感じたことと大学卒業後のキャリア形成に役立てようと考えたからです。私は帰国生であり、同時に日本に住みながら英語力を維持することが課題でした。そのため、この機会を利用し英語を学術的な場面で用いることで向上できると考えました。また、大学生活を送る中で行動や考え方が閉鎖的になってきているのではと感じたので、将来を見据えて積極的に自身から働きかけることで新しい経験を活かし、卒業後に繋げていけると思ったからです。実際に討論会を体験し、かけがえのないものを提供していただきました。

討論会はメンバーが決定してから週１回間隔のミーティングで集まり、討論のテーマを絞っていきました。討論のテーマである「教育」、「移民」に興味のあるメンバーに分かれ、ここから５人チームでプレゼン、討論の準備をしていきました。私が加わった移民班では、夏休みの間にメンバーのスケジュールに合わせて大学内で集まり、テーマについて討論を重ねていきました。そうした中でさまざまな議題が見つかり、それらに対して具体的な解決策を考えていくことでテーマへの理解を深めていきました。しかし、一方で移民問題は広く、方向性が絞られていなかったため収拾のつかないことが多かったです。「移民受け入れは労働力不足に応えうるか」という問題に対し、議論から離れた話題や説得力のない議論も話しました。私はこのとき自由であるからこそ、難しいことがあると実感しました。メンバーの意見を受け入れること、統一することは思っていた以上に困難であり、またやりがいもありました。プレゼンのパワーポイントの作成に取りかかってからは英語の表現方法や見やすさといった細かいことに気を使い、限定された時間内に完成度の高いものができたと思いました。

実際の討論では時間は短いものの現地学生とテーマについて議論していくことができ、充実していました。一方で彼らのありのままの質問に私は翻弄されました。彼らは端的に述べたいことをまとめ、実に簡単でありながら答える立場としては答えづらいものばかりでした。質問に対して返答するのがやっとという状態です。咄嗟に質問されると答えられず、討論が終わった後にこう答えれば良かったのか、と色々考えることにもなりました。また、討論をする上でお互いの文化や慣習といった前提の理解が不可欠なことがわかりました。それは自分の国を紹介することがテーマを共有するとき、非常に重要だと感じたからです。

準備から本番まで自分の至らなかった部分は他のメンバーや先生方に助けられ、さまざまなサポートをしていただきまし

た。今後、欧州討論会の経験を活かし、プレゼン、討論といったスキルを改善していけたらと思います。そして、これを通じてまた新しいことに挑戦していきたいです。

パリ東大学クリテイユ校での討論を通じて

伊藤　宏次　経済システム４年

私たちはパリ東大学クリテイユ校（University Paris Est Créteil: UPEC）の学生たちと「教育のスタイルについて：経済的な影響があるのか？」について２日間にわたり討論をしました。今回はUPECに留学しているイタリアのミラノ・ビコッカ大学からの学生を加えた３大学間での討論会となり、欧州英語討論会初の試みとのことでした。またUPECからのプレゼンテーションは学生からは勿論、教授からや修士の学生からと多岐にわたり、様々な視点から教育と経済の関連性について議論ができたと思います。プレゼンテーションは最初に行われたUPEC学部長による、UPECの概要紹介を含め２日間を通して計６回行われ、各プレゼンテーションにつきそれぞれディスカッションが行われました。

私たちのプレゼンテーションの内容としては、教育と経済について関連性があるのは明らかだったので、それがどうお互いに関連しているかの事例を交える形でプレゼンテーションを行いました。一方、UPEC側からはフランス・イタリアの教育システムやEUの教育システムを通じて、社会の移り変わり中で教育がどう変化・対応していったか、という内容のプレゼンテーションがありました。これらのプレゼンテーションとディスカッションを通して、「グローバル化に伴い留学生が増えているが、留学生の学費を税金でまかなうことの是非は」「ボローニャ宣言により、ヨーロッパの大学全体の国際競争力は高まるが、経済的弱小国の大学の競争力は低下するのではないか」「経済的背景から再生産される教育格差を是正することは、経済的に効率的なのだろうか」など、興味深い考察があったと思います。これらに共通する点は「限られた資源を経済的インセンティブによりどう効率的に分配するか」という点だったと思います。それに対するひとつの答えはなく、２日間を通して、この問題に対する考察を深められたのではないかと思います。

「昨日と今日、私たちの２日間を振り返って私たちがそれぞれどう思ったのかを、みんなで話してみようよ。」

あるフランスの学生による提案で、フランス最後の夜、私たちはテーブルを囲んで２日間の思い出を語りあいました。「楽しかった」「初めて日本人に会ったけれど、これからうまく付き合っていけそうだ」「これからも連絡を取り合おうね」など、答えこそ様々だったけれど、全員に共通していたのは「この交流の場を持てたことに感謝したい」ということだったと思います。最後にマッコレー先生、石渡先生をはじめ、このプログラムに協力してくださった全ての方々に感謝したいと思います。

欧州英語討論会

今川ロネル宙子　国際経済１年

今回の欧州英語討論会はパリ（仏）とボーンマス（英）で行われました。私たち欧州英語討論会のメンバーは、プレゼンテーションをするにあたって、二グループに分かれました。私は、パリで行われた教育と経済の関係についてのプレゼンテーション担当のグループに入りました。今回の欧州英語討論会を振り返り、自分の感じたことや反省点等をまとめてみました。

初めに、欧州英語討論会での私個人の経験について書きたいと思います。これまでにも、少人数でプレゼンテーションを行ってきたことはありますが、今回のプログラムのように、大規模なものはもちろん行ったことがありませんでした。グループ全体のプレゼンテーションは30分と長く、そのために数カ月かけて準備することもすごく新鮮でした。準備期間の初めの頃は、なかなか主題や疑問もまとまらず、テーマが広すぎるような感じがあり、メンバーは共に迷っていました。時がたつにつれ、テーマに関連して情報収集しながら、少しずつひとつの主題へと絞っていきました。準備期間中、メンバーと共にテーマ自体を模索したり、主題を決定したり、調査や勉強に取り組む過程で、私はチームワークを学んだ気がします。一人で勉強しがちだったので、今回、欧州英語討論というひとつの「経験」をメンバーの人たちと分かち合えたことが私にとって、とても大きかったです。

次に、今回の欧州英語討論会での反省点について書きたいと思います。この反省点は、欧州英語討論会でのプレゼンテーションに関してのことです。私は「経済と教育の関連性」がテーマのグループの一員でした。私たち一同は、経済よりも教育の方に重点をおき、討論会なので、プレゼンテーションよりもディスカッションを主要にしました。

しかし訪問先の大学では、経済的思考・発想を求められました。私たちなりには、筋が通っていると思っていたのですが、相手側には私たちの主張や論点などを完全に伝える事が出来ませんでした。また私たちが日本の現状を熟知しているので、フランス人の学生もそれをある程度理解しているという前提で、プレゼンテーションを展開させてしまったことがマイナスだったと思います。それに加え、ひとつのプレゼンテーションとしてのまとまりがなかったことも指摘されました。効率的な形で、プレゼンテーションに一貫性を持たせるためのチームワークが達成できなかったのだと思います。ただ、プレゼンテーションだけが今回の目的ではなく、今後にも欧州英語討論で学んだことを繋げていきたいと思います。

最後に、欧州英語討論会を支えてくれた教授およびこの貴重な経験を共にシェアできた仲間たちに、感謝の気持ちでいっぱいです。

Euro-Japan Dialogue

塚田　良美　国際経済３年

昨年、交換留学生としてイギリスのカーディフ大学に留学したときに、コミュニケーションに英語はもちろん必要だが、それ以上に蓄えた知識を使って、いかに周りの人を惹きつけて考えを伝えられるかだと感じました。欧州討論会はその点を鍛えられる絶好の機会だと思ったことが今回の参加理由でもあるので、その点を心がけるようにしながら準備を進めていきました。

今回はフランスとイギリスが開催国で、私はイギリスのBournemouth Universityでプレゼンテーションを行いました。イギリスでのテーマは「移民は労働力不足の解決策であるか」です。私たちは、解決策であるという方向性のもと、現在日本が抱えている問題点を踏まえた提案をし、移民をどう迎え入れていくべきかを考えていきました。私のパートでは、日本にいる移民労働者が、低賃金であることから自己向上していくことができず悪循環に陥っていることを紹介し、その解決策として政府による包括的な移民サポート体制を作っていくことを提案しました。

イギリス側からの意見で興味深かったのは、移民に多くの税金が使われていることに関して不満はないか尋ねたときです。例えば移民への医療保障が充実していないことによって移民の健康が損なわれるほうが、経済的損失になると考えていました。移民受け入れについては様々な視点がありますが、このように長期的な目で移民受け入れを考えることも日本に必要だと感じました。

全体的な反省点としては、プレゼン後の質問に答える際、言いたいことの適確な言葉が見つからず、内容の浅い表現になってしまったこと、またそれ以前に素早く自分の考えをまとめることが上手くなかったと思います。これらは今後の課題として気を付けていきたいです。

欧州討論会の成果の一つとして、今回のメンバーに出逢えたことが挙げられます。自分とは違った考えに刺激を受けることも多くありましたし、みんなで朝4時まで準備を進め、それでも妥協を許さずに改善部分を話し合ったこともあり、発表に向かって共に頑張れたからこそ得たものが多くありました。

また、今回の参加にあたり、McAulay先生、石渡先生、O' halloran先生を始めとする多くの方々に支えていただいたことに心から感謝しています。このような貴重な機会を与えてくださり本当にありがとうございました。

パリ大学東クリテイユ校にて

本吉　祐樹　経済システム２年

欧州英語討論会の存在を知ってから１年、選考から６カ月、そして活動開始から５カ月、私たちはパリの地に降り立ちました。討論会の舞台となるパリ大学東クリテイユ校はパリ郊外に位置し、その起源は12世紀まで遡ることができる長い歴史を持つ大学です。また横浜国立大学の協定校であり、交換留学で多くの学生が行き来をしています。到着して間もなく図書館など大学の施設を見学し、フランス側のメンバーと合流しました。

私たちの選んだテーマは『教育と経済』。私たちは教育と格差、それにグローバル化がもたらす効用や弊害について発表しました。

一方のフランス側はフランスの教育制度や留学生受け入れに関してプレゼンをしました。

彼らの発表の中で印象的だったのがフランス政府の留学生支援に積極的な点です。留学生が将来的にフランス社会に貢献することを見越して、戦略的に受け入れを行っている点は日本側としても参考になるかと思います。

教育の機会均等が失われつつあり、そのことが顕在化し始めた日本の現状を批判的に捉えている私たちと、そのことは、ある程度やむを得ないことだとするフランス側に意見の相違はありましたが、それゆえに双方の立場が見えてきて興味深いものとなりました。

プレゼンの準備のため、毎日のように昼休みに集まってミーティングを行っていました。時には20時過ぎまで図書館で話し合ったり、土曜の午前から集まったりしました。その時は大変でしたが、今となっては楽しい思い出です。互いに考えをぶつけ合うことで、それぞれが持っていない考え方や物の見方を知ることができました。このような経験は普段の大学の講義では得られない、欧州英語討論会に参加できたことで得られた貴重なものだと考えています。

引率のマッコーレ―先生、石渡先生、そしてメンバーの皆、受け入れの準備をしてくださった相手国側のみなさん、資料作成で協力してくれたパリ大学からの交換留学生Minhtriさん、本当にありがとうございました。

多くの人の支えがあってこその第五回欧州英語討論会であったと思います。

今回の渡航で得た経験を生かして、これからも自分を高めていきたいです。

欧州討論会に参加して

松本　遥佳　国際経済４年

欧州討論会はヨーロッパの二カ国でプレゼンと討論を行うプログラムですが、その醍醐味は事前準備にあると私は思います。６月に初めてメンバーが顔合わせをし、２つのトピックごとチームに分かれて、プレゼンの準備をします。私は今回、移民について扱う班のリーダーを務めました。メンバーの多様なバックグラウンドや知識から生まれる、豊富なアイディアや意見を、30分のプレゼンに落とし込むことに苦労しました。けれど学年も違うメンバーが、互いに遠慮なく意見をぶつけ合い、時には他の班や先生からアドバイスをもらうことで、自然とプレゼンはまとまっていきました。何より、最初はほぼ初対面だったメンバーが、半年をかけ一つの目標に向かって一緒に悩んだり、笑ったり、楽しんだりして、とても仲の良いチームとなった事が本当に素晴らしいと思います。また私個人としても、初めてリーダーという役割を担い暗中模索の状態でしたが、自律的なメンバーの協力のおかげで、リーダーとしてすべきことを学び、他のメンバーと対等な関係で気負うことなく役目を遂げることができました。この経験は私を確実に成長させましたし、他の場面でも現地でも多くの経験を積みました。私は、このプログラムに対する他の学生の関心の薄さが残念でなりません。国際的なことに興味がなくても、各々が自身にとって大きなものを得られるので、ぜひもっと多くの学生に参加してほしいと思います。

欧州討論会

三浦　真宏　国際経済４年

５月の面接から早半年が経ち欧州討論会を無事終え、そして今、欧州での友人や先生と過ごした日々、それに向けた準備期間など素晴らしい思い出に思いを馳せながらこのレポートに取り組んでいます。石渡先生に参加を勧められ面接を受け、幸運にも参加のチャンスを得ることが出来た私ですが、その時は欧州討論会がこんなにも実り多いものになるとは予想だにしていませんでした。先ず、全てのメンバーと先生、そしてパリとボーマスでお世話になった学生と先生方にお礼を言いたいと思います。ありがとう。

英語力の向上は、学生時代にやるべき事として入学当初から考えていた目標の一つでした。大学で開講されている国際交流科目を履修し、英語の塾に通っていたこともありました。１年生の終わり頃からは交換留学を目指しTOEFLの勉強にも精を出しました。しかし思うように点数が伸びず、結局は弱い自分に流され全てが中途半端で自堕落な毎日を気がつけば送っていました。就職活動を終え時間が出来、自分で立てた目標を少しでも達成しようと最後の悪足掻きを試みた、それが私にとって欧州討論会参加の意味の一つでした。

「英語が世界中の人と人を繋ぐ」パリで現地の学生が招待してくれたレストランで彼らと話している時、不思議な気持ちになった事を思い出します。彼らの母国語はもちろんフランス語、私達は日本語。しかしお互い英語で会話をしている。海外には旅行でしか行ったことがない私は、この時「英語によって人と人は繋がり理解し合える」という事をまざまざと実感しました。人の好奇心は納まるところを知りません。私自身、小中高大とより広い範囲から集まる友人との新たな出会いが楽しみでした。大学という場は日本全国から集まる生徒達のステージであり、次のステージは言うまでもなく世界だと私は考えています。その為には一つのツールとして英語が必要不可欠なのです。このように世界を目指す意識の高い生徒が英語を学びそして話す。私達もそのレベルまで達してしかるべきだと思わないでしょうか。英語を話すことで、私達は好奇心を満たす多くの新しい何かと出会うことが出来ると同時に、将来の可能性を大きく広げることが出来るのです。討論会を通し私も更なる英語力のブラッシュアップが必要であると痛いほど感じた為、今後も英語の勉強を継続していきたいと考えています。

欧州討論会に参加し得た財産の一つに友人も挙げられます。

６月の顔合わせからミーティングを重ね、時には徹夜で準備を行った仲であり、多くの時間を共有し苦労も共にしたことで討論会中の一体感、終了後の達成感も一入でした。皆と別れ岐路に就く時、少し感傷的な気分になったことを覚えています。欧州討論会を通して知り合った素晴らしい友人達を人生の財産として今後も大切にしていきたいと思います。

４年間の大学生活集大成としてこのプログラムに参加し、６ヶ月前と比べ英語力はもとより、大切な思い出や友人、一言では語れないほど沢山のものを得る事が出来ました。欧州討論会は今年で５年目。今後もマッコーレー先生と石渡先生のご指導の下、更なる発展を遂げていくことを祈っています。

留学生として参加して

Batsaikhan Munkhbat　国際経済２年

今回欧州英語討論会メンバーとしてヨーロッパへ行きました。自分ひとりだけが留学生で、さらにこのプログラムに参加する始めての留学生でした。横浜国立大学であるからこそできる貴重な体験をさせていただき、Alec（McAulay先生)と石渡先生、そして大学の皆さんに感謝の言葉を述べたいと思います。

５月に欧州英語討論会に応募し、参加できることが決まって以来、テーマの決定から資料探し、パワーポイント作成まで時間は長かったにもかかわらず、あっという間に過ぎてしまいました。しかも発表での自分の出番はたったの５分で終わりました。しかしその５分という短い時間は本番までのみんなの努力の結晶であり、みんなのがんばりの汗は測りきれないものだったと言っていいでしょう。

私は教育についての発表のグループに所属していましたので、パリ東大学クリテイユ校（UPEC）で教育と経済の関連についての発表とディスカッションに参加しました。私たちのテーマは「教育のスタイル：経済的な影響があるのか？」でした。自分たちの意見を述べ、私たちなりに教育と経済の関連性を追求したことはパリの大学の先生や学生たちに高く評価されました。それは、今回の私たちだけに限らず、毎年、欧州英語討論会に参加する横浜国大生たちが残した成果でもあります。そこで、とにかくその成果をリレーし続けることができ、何よりうれしく思います。

また、私がこの欧州英語討論会について是非伝えたいことは、パリの大学生たちとの交流です。討論会では、みな、お互いに真剣に取り組んでいましたが、その後の交流会では自分たちの毎日の学生生活をはじめ、フランスと日本の現状や社会問題まで幅広く話し合うことができ、有意義なひとときを過ごすことができました。

イギリスの討論会でも、私の国、モンゴルや日本ではなかなかできない体験をしました。そのひとつが、ボーンマス大学で行われた移民問題について学んだことです。移民についてプレゼンテーションをするグループとボーンマス大学の学生たちの議論から両国での移民問題の現状について理解しました。モンゴルには移民問題が全然存在しないので、来日して始めて、そのような問題を意識するようになりました。

もう一つは、 世界金融業界のトップを走るJ.P Morganのボーンマスにある支社への訪問です。ここはJ.P Morganが世界中に所有する支社の中でも重要な拠点となっています。メンバー全員にとっても印象的で、これから就職を考える私にはとても貴重で有益な体験でした。

以上が欧州英語討論会開催中に関してですが、ここから個人的に旅行をした部分での印象を少しだけ言いたいと思います。今回の欧州英語討論会の舞台は、フランスとイギリスしたが、私はイギリスで偶然観戦したフットボールの親善試合がこの２カ国、イギリス対フランスのものでした。偶然ですが、不思議な出来事でした。

とにかく一言で欧州英語討論会について言うならば、「最高の勉強ができた旅」ということです。

J.P.Morganでの企業訪問

佐渡村　光平　国際経済４年

11月12日、私達はJ.Pモルガン・ボーンマス支社への企業訪問を行いました。街の中心から車で約10分の所にあるJ.Pモルガンは近代的な建物と多くの自然に囲まれた非常に魅力的な外観をしていました。ここでは、4000人にも及ぶ人々が日々働いているといいます。ここで私達はボーンマス大学からの学生達とともに、非常に有意義な体験をする事が出来ました。

まず、人事の方からの会社概要の紹介がありました。「リーマンショック以来、企業内でどのように意識の変化があったのか」、「この金融危機の中でJ.Pモルガンはいかにして生き残る事ができているのか」等、回答が難しそうな質問に対しても丁寧に答えて頂きました。

その後は新人社員の方から、就職活動に関する話を伺いました。印象的であったのは、彼女は大学時代の専攻が文学であったという点です。多種多様な優れた人材を求めているという企業の理念を感じ取ることが出来ました。その後、ベテラン社員の方々からも楽しく興味深い企業の話を伺う事が出来ました。

その後は社員の方々にオフィスの内部を案内して頂きました。私自身、特に驚きであったのが、男女に偏りなく、幅広い年齢層の人々がそこで働いていた点です。お互いが常に新鮮な刺激を与え合う事が出来る環境のように感じ、非常に魅力的でした。

今回の欧州英語討論会は、異文化交流や自分の能力を更に高めるという点で本当に収穫の大きいものになりました。それだけではなく、自分に対する自信や将来に対する希望も持つきっかけになったと感じています。企業訪問に関しても、私はそれまで日本以外の国で就職活動を行うという事は考えた事が有りませんでした。しかしこの訪問を終えて感じた事は、外に足を踏み出せばそれまでの自分が持っていなかった選択肢があるかもしれない、という事です。「国際性」を磨き、強い好奇心を持ち続ける事で、自身の可能性はどんどん広がっていくものであると確信しました。

J.P.Morganを訪れて

林　文美　国際経済４年

J.P.Morganといえば、国際的に有名な一大企業！！そんな会社を訪問できると聞いて日本にいるときから楽しみにしていた。既に、就職活動を終えていたので、何となく想像はしていたが、やはり日本の会社と比較して「上下関係が厳しくなくざっくばらん」という印象を感じた。司会をしていた３年目の女性社員は、後のスピーカーであるマネージャーとすごくフレンドリーに話をしており、私たちの質問にもざっくばらんに答えてくれた。女性社員は、朝が弱いので特別な用事がない限り、９時に出社すると言っていたが、そういった点も日本と比べてすごく自由！

また、一緒に訪問していたイギリスの大学生も日本の就活生と雰囲気が全く違う。服装が自由かつ畏まった様子があまりなかった。質問の内容に関しても、日本のように「志望動機ややりがい、仕事の内容」を聞くことはなく、選考に関してやインターンシップの質問が多かった。イギリスでは、カリキュラムの一環としてインターンシップをすることも多く、学生の頃から社会人の感覚を身につけられるので少し羨ましいと思った。

私は、来年から日本の会社で就職するが、イギリスの大学生とともに外資企業を訪問できたことはすごく良い体験となった。来年参加するメンバーには、是非真剣に就職活動をするつもりで話を聞いて欲しいと思う。日本の会社と比較して外資の悪いところを見つけてもよし、興味を持ったら物怖じせずに選考にチャレンジするのもよし！

余談・・・

欧州討論会に参加するか迷っている人は、是非応募してください！！

チャレンジすることで、自分の限界や意外とやればできることを発見出来ます。自分の価値観を疑ってみたり、より確信できたりすることも沢山あります。結論、「きっと楽しい！」です。

EUROPE

Ben Lawrence

Bournemouth University, 2010

When we were told about the dialogue we could participate in, we were all very excited. It gave us an opportunity to see what other cultures thought on the issue of migrant workers. Once we had the volunteers together we had a discussion and decided the best way to get a discussion going between the universities was to only have a few slides and to discuss our views showing what the media say about migration in the UK compared to what economists can prove. We felt that this worked very well as it brought us to a good discussion with the Yokohama National University students letting us represent both our views and showing the differences between our cultures.

All the Bournemouth students were very impressed with the amount of effort which had clearly been put in by the Japanese contingent and it was very informative. The YNU students came across at first very shy, however towards the end of the discussion this seemed to disappear and they were all very talkative. It was very nice to share a few drinks with them in the evening especially as we were all very impressed with their level of English and their ability to be able to use it to hold very in-depth conversations with us.

Overall, we found the whole experience very enjoyable and would love to see it happen more often.

Stefania Lauciello

University of Pisa, 2009

The Euro-Japan Dialogue of November 2009 was a great chance for me to meet again the Japanese students and professors and the Scottish Professor McAulay, who I met at Yokohama National University during the year I spent in Japan attending the JOY program.

We discussed an issue that I personally consider very important, which is the reduction of CO_2 emissions. It was very interesting to share ideas about this theme between Italian students who were talking from the Italian and European point of view, and Japanese students who were conversing from the Japanese and Asian point of view. I think everybody realized that to reduce the CO_2 emissions around the world it is important to keep in mind the differences between the economic system and culture of each country. Moreover, human beings cannot be classified only by their nationality, their culture, but there are many aspects that make each individual different and special, so that to let the world become different and better it is necessary to improve the educational system to increase people's sensitivity to environmental issues, regardless of where they come from. In this way the next generation may probably do more than what we are doing for our world.

Jara Mara

Tomas Bata University, 2009

We were more than happy to welcome the YNU students here at Tomas Bata University in Zlin, in the Czech Republic. Even though their visit was a short one, it was a great and inspiring experience. The Euro-Japan program helped me to realize that people all around the world are often facing similar challenges as we are, and meeting Japanese students was an excellent chance to exchange different perspectives and viewpoints and learn from each other. Before the Euro-Japan program, I already had some knowledge of Japan. However, no information is better than the firsthand information. This opportunity enabled me to learn more about Japanese culture, language and way of living in general. Because we are coming from different parts of the world, we may have different ways of thinking. But it's the very cultural diversity that enriches us and helps us to understand ourselves better. I'm glad I could participate in this program and meet YNU students, who are nice and fun-loving people. They will always be welcome here.

Ulla Pirkola

University of Oulu, 2008

We were delighted to host the visiting YNU group on the Euro-Japan Dialogue programme in November 2008. They arrived just as the first snows of winter fell. As a student of Japanese with some experience of living in Japan, I looked forward to the debate sessions with great anticipation. Thinking about multiculturalism from the perspective of its impact and role in another culture made us take a look at Finnish culture in a whole new way as well. Talking with the Economics students from Yokohama National University made us realize not only the differences in our cultures but also the many common things we share - and that will be a major advantage for us in our future studies and life.

Jamie Masterson

Cardiff University, 2007

When the YNU students came to Cardiff, I learned a lot about Japan which I hadn't known before. I realised that there is only so much I could learn from books and that by discussing the issues with Japanese students I could understand the topic better from their point of view. It was also good to meet students from YNU as at that time I had an interest in studying in Yokohama as a foreign student. I arrived at YNU in 2008, and I have made friends with some of those students who took part in the program and from them I have learnt even more about both Japanese culture and language. I feel that the program helped to bring our universities, which are on opposite sides of the world, closer together.

Euro-Japan Dialogue: Frequently Asked Questions

1. What is the purpose of the programme?

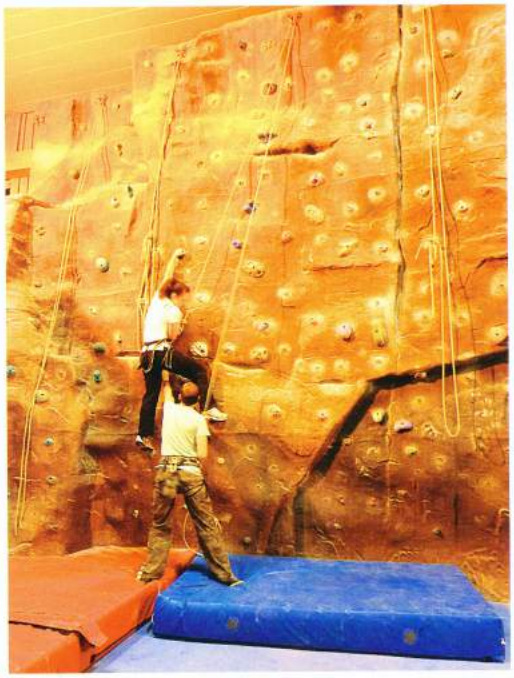
Euro-Japan is designed to give YNU students an intensive taste of academic discussion in overseas universities. They use real-life academic English in authentic settings. For the European participants, it is a chance to meet people from a distant culture. For European students studying Japanese, we include a Japanese-language session in the schedule. Sometimes, European students follow-up their participation in Euro-Japan by coming to YNU as exchange students.

2. What is the format?

The programme takes place over one week. The Japanese students meet in Europe on the Sunday evening and disperse the following Saturday. In between, they visit two European universities. The main event is the Euro-Japan Dialogue, a one-hour presentation and Q&A session on a set theme related to Economics, followed by one hour of discussion. There are two points to note here:

a. *Euro-Japan is not a formal debate.* The sessions take place in a spirit of collaboration, not competition. Japanese students are on the whole unfamiliar with adversarial-style debate and often do not possess the advanced English-language skills needed to execute such an undertaking.

b. *The discussion is student-student oriented.* We find the students get the most from the discussion when they are allowed to own it. For this reason, faculty members participate as observers, or moderators at most. We structure the sessions so that teachers' verbal participation is limited to brief closing remarks at the end.



The actual format may vary slightly depending on the needs of the host institution.

In the past, YNU students have also audited English lectures/ seminars on the host campus, made company visits, and taken part in social events and tours of local places of interest.

3. Where do the Japanese students stay?

All travel and accommodation arrangements are taken care of by the YNU side. If the European side feels able to provide help with accommodation, local transport, etc., we of course welcome such offers. But we do not require or expect it.

4. Is the programme subsidized?

YNU participants receive partial funding towards their costs. This varies from year to year, but on average has proven to be around a third of the total cost.

5. Who should apply?

In Japan, students who are independent, confident, have high-level English, and are willing to work hard in the preparation and execution of the programme, as well as complete the follow-up written reports and presentations when back in YNU.

On the European side, the program appeals to internationally-minded students with strong English and/or Japanese skills, who have an interest in foreign cultures and societies in general, and/or Japan in particular.

準備日程

4月	●欧州英語討論会の説明会開催
5月	●参加者選考のための面接
6月上旬	●欧州英語討論会第一回ミーティング（参加者顔合わせ）（これ以降、週1回のミーティング） ●概要説明、今後の活動予定発表 ●リーダー選出 ●役割分担決定 ●討論会テーマの検討
7月上旬	●討論会テーマの決定
7月下旬	●討論会テーマ候補３件採択→メンバーによるリサーチ ●相手校とテーマについて協議
夏休み	●リサーチ
8月下旬	●討論会テーマに関するリサーチの結果報告
9月上旬	●航空券、宿泊施設の手配
9月中旬	●テーマについてのリサーチ会議 ●プレゼンテーション内容の方向性について検討
9月下旬	●プレゼンテーションを具体的に構成（流れ、内容、グループとしての主張など）
10月上旬	●プレゼンテーションの内容に関して資料収集 ●日本語版プレゼンテーションの完成 ●プレゼンテーションの内容に対する想定問答集作成
10月中旬	●引率教員指導のもと、プレゼンテーションの推敲 ●英語討論の練習
10月下旬	●プレゼンテーションの完成 ●短期交換留学生対象にプレゼンテーションの披露および引率教員による助言、指導
11月	●各自の旅行日程の確認 ●欧州英語討論会に出発、現地にて参加者全員集合

History of Euro-Japan Dialogue

2006

- Youth Unemployment

University of Erfurt, Germany

University of Paris 12, France

2007

- Nuclear Power as Sustainable Energy

Cardiff University, Wales

University of Pisa, Italy

2008

- Multiculturalism

University of Bonn, Germany

University of Oulu, Finland

2009

- Declining birthrate: Target making babies or managing immigration?
- Carbon trading: Effective measure or too little too late?

Tomas Bata University, Czech Republic

University of Pisa, Italy

2010

- Education styles: Are there economic consequences?
- Is immigration a solution to labour shortages?

University of Paris-est Creteil, France

Bournemouth University, England

Celebrating 5 Years of Euro-Japan Dialogue

Following the successful one-week visit to our partner universities in France and the UK, a reunion event for all five cohorts of the programme's history took place on Saturday, January 22nd. Held in an Italian restaurant in Shinagawa, the event was attended by 25 people, with representatives from all five cohorts present. Professor Watanuki, who headed the 2006 and 2007 cohorts, was in attendance. He nows plys his trade elsewhere, but has fond memories of Euro-Japan and toasted its contiued success. Professor McAulay, programme organizer in 2008, 2009 and 2010 was there, as was Professor Arie, who has contributed support to the programme on various occasions. Since 2006, the program has sent students to carry out on-campus debate, discussion and company visits in various European countries, including France, Germany, Wales, England, Italy, Czech Republic and Finland.

At the party, the members shared memories of their interaction with European students, the opportunity the programme afforded them to improve their English and academic skills, and the friendships they still have with their European peers. Professor McAulay commented on the growth of the programme, noting some recent innovations. First of all, a three-way debate took place in Paris in November 2010 when Milano-Bicocca University from Italy participated. The visiting Italian delegation commented favourably on the preparation, academic presentation and English ability of the YNU group. A second new factor was that 19 students applied for 10 places in 2010, the first year that selection has been competitive. This element of competition seems certain to continue with the sixth cohort as the stature of the programme grows on campus.

The graduates at the party are now fully-fledged working citizens. They came from a wide variety of jobs, including Chugoku Electric Power, Japan Nuclear Fuel Conversion, Citibank and Itochu. The consensus was that their experience of participating in Euro-Japan Dialogue gave them an advantage when job-hunting. Current job-seekers were thrilled to hear this information. It is also an aspect of the programme that the attending professors pledged the university would make efforts to publicise to potential participants in the future.

The chat and camaraderie extended well into the night. The programme created friendships among Europeans and Japanese, but also between YNU students from different years and backgrounds. One final announcement was that the destinations for the sixth cohort had been decided - University of Edinburgh and University of Malta. Students interested in participating in Euro-Japan Dialogue 2011 should watch the Faculty of Economics notice boards at the International Student Lounge for information.

2010年度欧州英語討論会 参加者アンケート結果

回答者８名

1 準　備　何時間くらいプレゼンテーションの準備に費やしましたか？（月曜日の全体での話し合い、Jane先生の英語のレッスン、プレゼングループの話し合い、リハーサル（約1時間半）、原稿作成、PPT作成、リサーチ時間、個人的な練習等を含めて下さい。）

1．15時間　（0名）　2．16～20時間（0名）　3．21～25時間　（0名）
4．26～30時間（3名）　5．30～35時間（3名）　6．その他　40時間（1名）50時間（1名）

2 費　用　参加のためにどのくらいの予算が必要でしたか？

①航空運賃と欧州英語討論会開催中の食費、宿泊費、交通費などについてどのくらい必要でしたか？

1．～15万円　（0名）　2．16～20万円（6名）　3．21～25万円　（2名）
4．26～30万円（0名）　5．30～35万円（0名）　6．それ以上　（　　）万円

②参加に際して個人的な旅行を含めてかかった費用を差し支えなければ、教えて下さい。

¥20,000（1名）　¥30,000（1名）　¥100,000（1名）
¥50,000（1名）　¥70,000～80,000（3名）

3 実施期間　欧州英語討論会全体のアクティビティーで何が有益でしたか？（複数可）

1．準備　（6名）　2．プレゼンテーションとディスカッション（7名）　3．学生との交流（4名）
4．企業訪問（6名）　5．訪問先大学での授業参加　（2名）　6．その他　（　　）

4 実施終了　①欧州英語討論会から何を学びましたか？

・スキルを含めて自分にあるもの、ないもの、必要なものが分かりました。
・現地の学生との交流により異文化
・討論会を通して得たトピックに関する知識
・教育や移民についての知識と関心が増した。
・ディベートにおけるテクニック、プレゼン力
・自信（練習を重ね本番が終わった後自分自身の力が向上したことに気が付いた。）
・友人
・英語力

（回答は原文のまま）

②欧州英語討論会をもっとよいプログラムにするために改善点をあげて下さい。

・日程の詳細がもう少し早く具体的に分かればよかったと感じました。しかもそれも困るほどではなかったので全日程不自由なく過ごすことができました。

・討論の時間が足りない時もあった。

・相手大学のモチベーション

・現地学生と事前に交流できればよいのでは？

・皆で行動しているときのスケジュールをもう少しはっきりとさせてほしい。　（回答は原文のまま）

③その他コメント、意見等があれば書いて下さい。

・非常に貴重な体験をさせていただきました。有難うございました。

・とても楽しかったです。

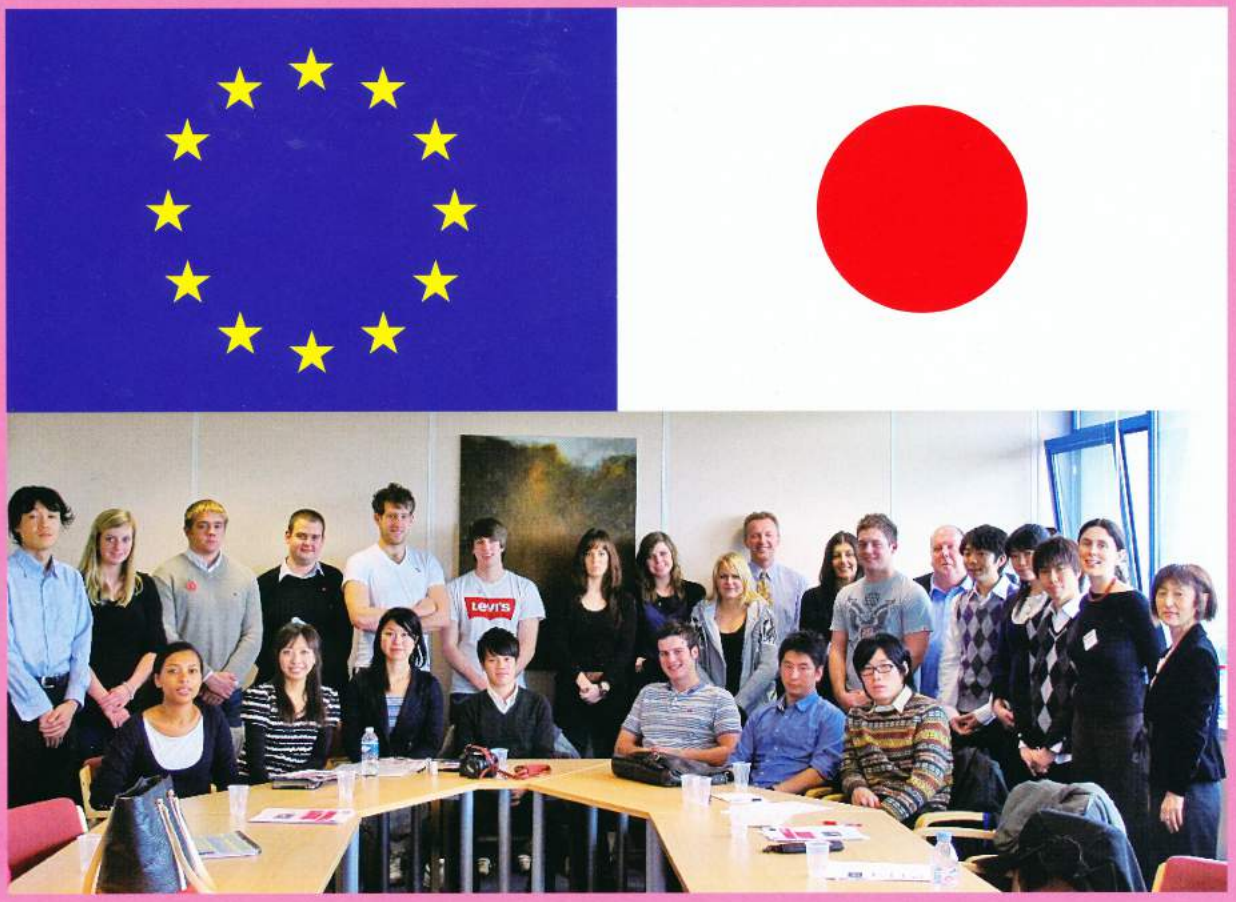
・とても有意義な時間を過ごさせていただきました。有難うございました。　（回答は原文のまま）

5　総合評価

2010年度欧州英語討論会に参加し総合的に評価して下さい。

1．大変満足（6名）　2．満足　（2名）　3．まあまあ　（0名）

4．不満　（0名）　5．大変不満（0名）



Yokohama National University
Faculty of Economics

Euro-Japan Dialogue 2010 Report
2010年度　欧州英語討論会報告書